

## 「ふるさと」は辛くて歌えない 路上で三味線民謡ライブ

南形公子（福13、2次、マジック）＝一番の心配は「キャパのない年寄りが行ってどんな効果があるのか」ということだった。でも、現地へ着いた途端、そんな考えは吹っ飛んでしまい、謙虚に接して下さる被災者の前では、チーム一丸となって、ただ必死で役割をはたすしかなかった。最後の日の名取が丘児童センターでのこと。男の子が「ぼく、マジックする人になりたい」と真剣な表情で訴えてきた。エッ、とびっくり。私の下手なマジックを見てそんな気持ちになってくれたのか。恥ずかしいやら嬉しいやら。私にとって、何よりのお土産になった。

海野龍英（食16、1・2次、田んぼ）＝私には大崎に20年来の友人がいる。奥さんは女川町で両親を亡くされたが「遺体が見つかってまだ幸せだ」といっておられた。私たちが神戸から来ていると話すと、「自分にもお手伝いさせて」と、受け入れ態勢づくり・宿舎の手配・情報提供を率先してやってくれた。私はハーモニカを持参。子供たちとたくさんの童謡を歌ったが、ある仮設で「ふるさと」は辛くて歌えないといわれ、現地では歌えずじまいだった。早く復興して被災者が故郷へ帰れるように願って、本日は会場の皆さんと「ふるさと」を歌いましょう。

小澤輝彦（生13、1次、田んぼ）＝阪神大震災の時、会社が全壊。全国から支援をしてもらったので、恩返しのつもりで第1次チームに参加。南三陸の山間で田んぼのガレキ運びをやった。炎天下、悪臭と闘いながらの作業なので、帽子・長袖・鉄板敷きの長靴・首にタオルのスタイルで、防塵マスク・虫よけスプレーも必需品。散乱する丸太・柱・家財を農道まで運ぶのだが、チーム一丸となって2日で3枚を片付けた。地主さんは「もうダメと諦めていた。塩抜きをして秋には何か植えます」と喜んでくれた。「やった」という満足感にひたることができた。

黒本茂弘（食13、1・2次、昔遊び）＝ブンブンゴマを回しながら登場。「今の子は不器用と言われるが、うまくいった時の顔・感動の笑顔は忘れられない」。宿舎近くにボランティアのテント村があったので、話を聞いた。ある若い女性は「東北の惨状を見て、居ても立ってもおれずに駆けつけた。ボランティアはするのではなく、させていただくという気持ちでやっています」と。私は日本にもこ

んな考えの若人がいるのかと感動した。私は力(感動)キ(気配り)ク(工夫)ケ(健康)コ(好奇心)を座右の銘にしているが、これが活動を長続きさせるコツだ。



増金スミ子（福11、1・2次、大道芸）＝（あつ、さて、あつ、さて...とおなじみの口上で登場）。開口一番「ボランティアは私を燃えさせる火ダネです」。自分も楽しみながら、東北の方に私の大道芸をみてもらい、笑顔を取り戻すきっかけになれば、とチームに参加した。派手な衣装姿の私を見て、「なんでこんな服着てるの」「日本語でしゃべってね」「動物風船ってどうやって作るの」。子供たちから次々質問が飛んでくる。「また来てね」「また来るね」。公演が終わると子供たちと別れを惜しむ日々。大変だったけど、子供たちの笑顔に励ましてもらった。

波多野武郎（食16、2次、民謡・三味線）＝石巻の仮設のこと。開演時間になってもお客が数人。三味線・ハーモニカ・拍子木を鳴らし、マイクとスピーカーを持って各戸を回り、やっと30人集めた。80歳の方は、漁師で民謡の先生。三味線を4棹流されたというので「私の三味線を弾いてみて」と手渡したが、すぐ「だめだ。弾けない」と返された。心無いことを言ってしまったと反省。呼び込みの途中、大漁旗を掲げている民家があった。民謡好きの人が集まって来たので路上ライブになった。民謡や三味線が被災者と私たちを結ぶ絆となって嬉しかった。

### メリケンパークで わ の東北写真展

神戸ふれあいフェスティバルが10月15～16日、メリケンパークで開催された。今年は東日本大震災の復興を支援するため、東北観光のPR・東北の物産、震災ボランティアの活動紹介などのブースが設けられ、連日多くの市民が足をとめ熱心に見入っていました。グループ わ の東北支援活動を紹介する写真パネルも展示され、第1次支援チームの清野明（生環13）、小澤輝彦（生環13）、平林啓子（音文18）、芦田義和（生環15）の4人が世話役として参加。来場者の質問に答えて現地の様子や わ の支援活動をわかりやすく説明しました。（広報・芦田義和）